

「反対から協働へ」

ダイナミックに方針転換する伊勢河崎のまちづくり (まちづくりかわらばん 第7号2004.3)

三重大学 浅野 聡

河川改修の渦にのみこまれる伊勢河崎の町並み

伊勢市のまちづくりというと、数々のまちづくり賞を受賞した内宮おはらい町の事例が有名ですが、おはらい町に続いてまちづくりが盛んになってきている地区に河崎地区があり、近年、この地区のまちが変わってきています。

伊勢河崎は、江戸時代に入り勢田川の水運を利用して、伊勢神宮の参拝客を迎える物資の問屋町として繁栄した地区でした。勢田川沿いに切妻造妻入の町屋や葦が建ち並ぶダイナミックな水景が、戦後も維持されてきていました。しかし1974年の七夕豪雨による水害後、建設省によって立ち退きの伴う河川拡幅を主とした勢田川改修計画がトップダウンで発表され、同計画を巡って地元は賛成と反対に二分されました。反対派の住民達は、専門家の協力のもと、立ち退きの伴わない水害対策を計画・提案しましたが、当時は建設省案を変更することは難しく、結局は河川改修工事が進められて右岸側が立ち退き、その水景は大きく変化してしまいました。しかし、この運動の中で河崎の歴史的町並みの特徴がひろく地域内外に認識されることとなりました。

反対から協働へ：都市マスを契機としたまちづくりの転換

その後、やや停滞気味のまちづくりを再び活気づける契機になったのが、1994年度から始まった伊勢市都市マスタープランの策定です。筆者も企画運営の責任者の1人として関わりましたが、策定にあたり中部地方では初めて公募型の市民ワークショップを開催し、市民・専門家・行政の協働作業を通して都市マスを検討することとなりました。このワークショップの場でも河崎の町並みが高く評価され、策定委員会で検討した結果、河崎は「歴史文化交流拠点」、勢田川は「勢田川歴史観光交流軸」として都市マス全体構想に位置づけられることとなり、公的計画となりました。伊勢市の方針転換は英断といえるでしょう。

伊勢河崎まちづくり衆と伊勢河崎商人館の誕生

全体構想が策定されたのとほぼ同時期に、地区内に残る河崎商人の代表的商家(小川家)が取り壊されて姿を消すおそれがあり、都市マスに位置づけられた歴史文化交流拠点として同商家を保存整備してほしい旨の要望が地元団体から伊勢市に出され、協議の結果、建物は小川家から伊勢市に寄付、土地は伊勢市が購入することとなり、都市マスの内容が実現するに至ったことは画期的でした。この大きな商家は「伊勢河崎商人館」と命名され、修復整備されて開館していると共に、現在は国の登録文化財にもなっています。また商人館の実現にあたり、伊勢市がハードとしての修復整備を、地元がソフトとしての管理運営をとそれぞれが役割分担することとなり、商人館を契機として地元のまちづくり組織がまとまって「NPO法人伊勢河崎まちづくり衆」を結成するに至りました。

かつての反対運動から現在の協働運動へ。ダイナミックに方針転換した伊勢河崎のまちづくりは、現在、勢田川流域の他地区や港、二見町との連携も進んで広がりをみせてきています。ぜひ、一度、伊勢河崎に遊びにいらして下さい。



写真5：河崎商人館

(連絡先：伊勢河崎まちづくり衆・伊勢河崎商人館
<http://www.e-net.or.jp/user/machisyu>
TEL&FAX 0596-22-4810)

豊田市小型電気自動車共同利用実験（まちづくりかわらばん 第5号 2003.3）

（財）豊田都市交通研究所 伊豆原浩二

豊田市の街中では、この頃とても可愛い自動車が走っています。これは小型電気自動車を会員が共同で利用するというユニークな実験です。ここではそれを紹介します。

実験の目的

豊田市では、鉄道、バスを保管する新たな交通システムとして、小型電気自動車共同利用システムの導入を目指しています。小型電気自動車共同利用システムでは、多くの人と同じ車を短時間・短距離の移動に利用することにより、街中の自動車の総数を減らすとともに、排気ガスを出さない電気自動車を使用することで、環境の改善を図ることが可能になります。また小型電気自動車共同利用システムにより、市内の移動の自由度が増し、まちの活性化への貢献も期待されます。

実験の概要

小型電気自動車共同利用システムとは、2人乗りの電気自動車「e-com」を実験会員の皆さんで共同利用するというものです。電気自動車は市内5箇所（豊田市役所、豊田市駅前、産業文化センター、トヨタ自動車本社、豊田駅西）に設置されたデポにて貸出し・返却を行うことができます。また、利用に際しては、電話による事前予約が必要となります。

小型電気自動車とは

今回の実験で使用される、2人乗りの小型電気自動車「e-com」は、最大時速は100km/h、一回の充電による走行距離100km、専用充電器での充電時間は約2.5時間程度です。排気ガスを出さない電気自動車を使用することで、排出CO₂の削減や都心の大気環境の改善を目指します。また、振動・騒音が少なく、沿道の居住環境にも貢献できます。

利用条件

一回の利用当たり最大3時間、30kmです。会員は個人会員、法人会員がありますが、昨年募集され、登録された人です。



写真： 小型電気自動車 “e-com”



図： EV 実験イメージ

岐阜駅周辺整備計画（まちづくりかわらばん 第4号 2002.8）

岐阜市助役 松谷春敏氏講演から

岐阜駅周辺地区では、連続立体交差事業と新駅舎の完成を契機に、高架下を活用した商業・文化施設「アクティブG」や市民活動・教育拠点施設「ハートフルスクエアG」などの機能集積が進み、これらが繊維問屋街など周辺再開発事業の進捗にもつながりつつあるようです。「アクティブG」は、岐阜の伝統である匠の技やデザインを新しい都市文化や産業として継承する場であり、伝統工芸からアート・クラフトを「創る・売る・学ぶ・情報発信する」という機能を兼ね備えています。また、「ハートフルスクエアG」では、生涯学習センター、女性センター、図書館、体育ルームが設置され、広域的な市民活動を支えると同時に、街なか居住を支えるインフラとしても機能しそうです。

岐阜市では中核都市としては遅れて駅前広場が整備されつつありますが、これが幸いして他都市にはない自然環境を取り込んだユニークなものとなったとの説明が印象的でした。駅南口ではせせらぎを駅前広場に引き込み、充実した植栽も行っています。また、せせらぎの延長上には、都市河川を生かした親水公園の整備が計画されており、その周辺では自然環境にも恵まれた街なか居住が確保されそうです。中心市街地の再構築や活性化は地方都市再生の鍵をにぎるだけに、岐阜市の意欲的な取り組みは注目されます。



写真1:高架下を活用した「アクティブG」



写真2:岐阜駅南口広場のせせらぎ

(写真の出典はいずれも岐阜市パンフレットから)